子孫相繼いで藩に仕へる。

タカギスケヒラ 高木祐平 通稱平左衛門。湯淺祗庸の服忌學の高弟で、嘉永二年服忌日數類表を著した。

タカギマゴスケ 高木孫助 初め六組御歩から出で、新知百石を受けて組外に列し、三十人頭に任じ、文政九年歿した。子孫相繼いで藩に仕へる。

タカギモリ 高木森 鹿島郡矢田の内の小字。

タカクハキンスイ 高桑錦水 鳳至郡輪島の畫家。一號松齋。名を興共と稱し、文政前後を盛時とした。

タカクハゲンシュン 高桑玄春 元祿十六年藩醫として召出され、百五十石を領し、享保九年歿した。子孫正悅・春悅相繼ぎ、玄春通考の時明和四年出奔した。

タカクハゴヘエ 高桑五兵衛 大聖寺侯前田利明に仕へて、最も馬術に長じ、二百石を受け、後前田綱紀に屬して五十石を加へ、元祿四年歿した。子孫相繼いで藩に仕へる。

タカクハショウエモン 高桑祥右衛門 初め御算用者で年寄中席執筆より出で、小頭並に進んで新知六十石を領し、後三十石を增すこと兩次にして組外に列し、文政三年歿。子孫相襲いで藩に仕へる。

タカクハタケカズ 高桑武數 通稱源左衛門。一向一揆の首領であつた。天正四年八月廿一日下間刑部卿法眼宛の連署狀には、諱を茂數とするが、それは越賀雜記に據つたものであるから、同年の他の文書に武數とあるを採るべきであらう。

タカクハビンゴ 高桑備後 寶永誌に、石川郡割出に高桑備後の館址のあることを載せる。越登賀三州志には、天正八年閏三月柴田勝家等の加賀に討入つた時、割出の高桑備後が降つたことを記し、その註に、天正四年八月二日加州の賊將から下間刑部卿法眼に與へた誓狀中に高桑源左衛門が見えるが、備後はその族人であらう。後に割出の畑中に館といふ所があつて、それが備後の館跡であると傳へる。備後の子五郎は河北郡森下に逃れ、染工を業としたが、割出で館を有したから館紺屋と呼ばれたとある。

タカクハランコウ 高桑蘭更 金澤の俳人。諱は正保。屋號は釣瓶屋、通稱不詳。初號闌阜、一號半化坊。初め俳諧を希因に學び、李桃亭・狐狸庵又は二夜庵を建て、醫業の傍俳想を練つたが、遂に江戸に出て二夜庵を再興し、更に天明の初京都に移つて双林寺中南無庵に住するに及び名聲大に顯れた。南無庵の側の小堂に許六の刻んだ芭蕉の像を安置してあつたので、又芭蕉堂ともいひ、門下に籍を列する者千を超え、寛政五年二月二條家から花之本の號を許され、十年五月三日七十三歳を以て歿し、高畠寺の塔頭月眞院に葬られた。その著に花の故事・俳諧有の儘・藥樂考・俳諧世說・芭蕉消息集・續七部集・月花傳等があり、生前の句集に半化房句集がある。又追悼集には一周忌に豐前の有隣の三日の光、七周忌に加賀の門人阿育齋の續柞原集と未亡人得終尼の桃のやどり、十七周忌に安藝の篤老の合歡雨集、百年忌に南無庵八代と稱する京都の楓城の百めぐりがある。

タカクラ 高峅 白山記に九所の小神を擧げた中に、『高峅、能登鈴』と見える高峅の峅は、越中立山の岩峅寺・芦峅寺と同じくクラと訓じ、高倉又は高座とも書き、白山本宮に在る大永七年の託宣記には、『白山九所ノ小神高倉、能登鈴ノミサキ』ともあつて、寺家の高座宮卽ち高倉彦神社のことである。

タカクラゴウ 高藏郷 丹後國九世戸文珠堂天橋山知恩寺の寶物目錄に、『牛ノ玉、寄進主能登洲鈴郡三崎高藏郷久分山增上房安清』と記する。三崎高藏郷久分山增上房は三崎郷高座金分宮增長房などの誤であらう。

タカクラジンジヤ 高倉神社 珠洲郡眞脇に在る。式内等舊社記に、『高倉神社。木郎郷眞脇村鎭座。稱ニ高倉權現ニ。舊傳云。中古勸ニ請三崎高倉彦神之神靈一也。』とある。

タカクラノミヤ 高座宮 →スズジンジヤ 須須神社。

タカクラヒコジンジヤ 高倉彦神社 →スズジンジヤ 須須神社(一)。

タカクラヒコジンジヤ 高倉彦神社 珠洲郡蛸島に鎭座する。寛文の頃回祿に罹つて、その後公儲に登錄せられず、明治四年神社に列せられたものといふ。

タカクラヤマ 高倉山 石川郡木滑に在る。高さ九二二米。地質石英粗面岩。登路木滑から頂上へ一粁五。

タカクラヤマ 高倉山 珠洲郡眞脇の部落西方にある山。高さ一二二米。

タガケンザブロウ 多賀賢三郎 明治二年八月山邊沖太郎等が本多政均を暗殺した時、多賀賢三郎もその議に與つてゐた爲に、七十日の閉門に處せられた。その後賢三郎は金澤縣の少屬に任じたが、四年十一月十六日關西に出張した際、本多家の舊臣芝木喜內・藤江松三郎の追跡を受け、廿四日近江長濱驛に於いて殺害せられた。

タガゲンポウ 多賀元方 字は直卿、鵬溟と號し、もと小松の人で、前田吉德の時召されて侍醫となつた。元方侯に從うて東都に在るの日、詩を石島筑波に學び、又物徂徠・太宰春臺に就いて益を請うた。

タカサカ 高坂 河北郡井上庄に屬する部落。

タカサカ 高坂 能美郡板津郷に屬する部落。

タカサキアンナン 高崎安南 前田利長の御茶堂で百六十石を領し、寛永九年歿。次代半九郎の時に家斷絶した。

タカサキハンクロウ 高崎半九郎 寛永九年祖父安南の遺知百六十石を襲ぎ、定番御馬廻に班したが、元祿三年七月九日深美右京に御預となり、八月廿一日越中五ヶ山に流され、十四年五月配所で歿した。半九郎は、定番御馬廻百二十石青木治太夫・同百石安見與八郎・同百石池田傳十郎と共に、遊女を集め置いて不法の事があつた罪に因るもので、他の三人も亦五ヶ山に流された。

タカサキモトカタ 高崎固賢 通稱小源太・平左衛門。嘉平次賢正の養子となり、寛保二年遺知百五十石を受け、大小將組に列し、御右筆に任じ、天明五年五十石を加へ、寛政六年歿した。

タカサハウシノスケ 高澤牛之助 前田利常に仕へて四百五十石を領し、享保五年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

タカサハキクカン 高澤菊闇 通稱仙之助。藩末の頃明倫堂の教師として詩を能くした。